

「わたしも罪に定めない」井上隆晶牧師
イザヤ書 61 章 1～3 節、ヨハネによる福音書 8 章 1～11 節

①【イエス様にかけられた罠】

イエス様が朝早く、神殿の境内に入っていくと、多くの民衆が自分のそばに集まってきたので、イエス様は座って教え始められました。すると、そこへ律法学者やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女の人を連れてきて真ん中に立たせ、イエス様に「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」（ヨハネ 8：4～5）と問いかけました。モーセの律法とは、具体的にはレビ記ですが、そこにはこう書かれています。「隣人の妻と姦淫する者は、姦淫した男も女も共に必ず死刑に処せられる。」（レビ 20：10）これによると女性だけでなく男性も連れてこなくてはいけないのに彼らはそれをしていません。彼らの目的は、律法を守ることにあるのではなく、イエス様を試して、訴える口実を得るためだったのです。

イエス様が「この女を殺せ」と言えば、イエス様は愛と憐れみの人であり、罪人の友であるというのは嘘であるといつて群衆をイエス様から引き離すことができます。また当時、死刑を決定し執行するのはローマの権限であってユダヤ人にはありませんでしたから、イエス様のことを「反逆者」としてローマに訴えることができます。また反対に「石で打ち殺してはならない」と言えば、律法を破る者として訴えることができますし、不義や姦淫を容認する者と宣伝することができます。だからどちらに答えてもイエス様を訴えることが出来るのです。

②【沈黙するイエス様】

イエス様はかがみ込み、指で地面に何か書き始められました。主は何を書いておられたのでしょうか。アルメニア語聖書では「彼は顔を伏せて指で地面に、彼らを断罪することばを書いた。彼らは地面に自分たちのいくつかの罪が書かれているのを見た」となっています。地面とは土です。土をヘブライ語でアダマーといい、土から造られたので人間をアダムと呼ぶようになりました。土に書くとは、アダムの心に書くということです。その昔、主はその指で石版に十戒を書きましたが、その同じ指をもってキリストは私たちの心に良心を書かれます。しかし屈みこみ、沈黙される神の前で、人間の裁きと正義の主張が飛び交います。

なぜいつも律法学者や、ファリサイ派の人たちは、イエス様に敵対するのでしょうか。それは、第一に、彼らはまじめに生きて来たのに、イエス様が自分たちを認めないで、貧しい人、罪人、外国人を認め、受け入れ、愛されたからです。つまり嫉妬からでしょう。第二には、彼らはイエス様という本当に正しい人が現れた

時、自分の偽りの正しさが暴かれるのを恐れたからです。だから、自分よりも正しくない罪人をいつも連れてきて優越感に浸るのです。だから彼らは本当に神の前で生きていないのです。神の前で生きる人は謙虚になるはずですが、神はそんな彼らを憐み、自分の正しさを捨てるようにと今日も沈黙して待っておられるのです。「わたしたちの主の忍耐深さを、救いと考えなさい。」(Ⅱペトロ 3 : 15)

③【裁く権限は人間には与えられていない】

イエス様は立ち上がり言われました。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まずこの女に石を投げなさい。」(7 節) 主はこの女の人に石を投げなさい！と言われました。つまり彼女は罪を犯したのだと宣言されたのです。ただし、石を投げられるのは罪を犯したことの無い者だけであるとも言われました。この世の中に罪を犯さない者は誰もいません。だから誰も人を裁くことはできないのです。そこで年長者から始まって、一人一人が立ち去り、そこには誰もいなくなってしまうしました。人を裁く権限は人間には与えられていません。人を裁くことができるのは神だけです。「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。」(マタイ 7 : 1) と言われています。でも人間は簡単に人を裁きます。

●91 歳になるジャーナリストの T (田・・・) さんが、TV 番組の中で、高市早苗自民党総裁のことを「あんなやつは死んでしまえ、と言えがいい」と発言し、それが問題となり番組は終了することになりました。歳を取り、だんだん自分を制御できなくなったのでしょうか。聖書の言葉通り、人を裁く人は、その裁きが自分に返ってくるのだと思います。

では旧約聖書で裁けと命じられているのはなぜかと問う人もいるでしょう。またこの世の裁判はどうかという方もおられるでしょう。

●今、北海道や東北地方、本州でも熊による被害が異常に増えています。それで熊を駆除するのですが、動物愛護団体からクレームがものすごく入っています。熊が人里に出て来るのはそれなりに理由があります。人間が熊の生活の場を荒らし、山の奥に入ってきたので、山の環境が変わり、今年の暑さでどんぐりが出来ずに、仕方がなしに食べ物を求めて山から降りて来るのです。熊だけが悪いのではなく、人間も悪いのです。でもこれ以上被害が広がらないためには駆除も仕方がないのです。熊を殺すのは悪です。でもこの悪をしなければなりません。これを必要悪と言います。

人間のする裁判も同じで必要悪です。これ以上被害が出ないようにするため、犯罪者を隔離し、法で裁きます。でもこの世の法も裁きも完全なものではなく、不完全なものなのです。冤罪もあります。完全を求めない方が良くと思います。完全な方が裁くまでは、私たちは人を裁けるような者ではないと、いつも自戒していなければならないのです。なぜ人はこんなにも裁き合うのでしょうか。それは結局、人間がこの世から神を追い出したからです。神のいない世界だからこそ、勝

手に人が裁くのです。いつも目の前に神を置く人は、自分の唇を慎みます。

④【私もあなたを罪に定めない】

結局その場にはイエス様と女の人だけが残りました。イエス様は女の人に「**誰もあなたを罪に定めなかったのか**」と聞くと、女の方は「**主よ、誰も**」と答えました。するとイエス様は「**私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからはもう罪を犯してはならない。**」(11 節)と言われました。この「罪に定める」という言葉ですが口語訳もバルバロ訳も「**わたしもあなたを罰しない**」と訳しています。祈拝文によく「**定罪**」という言葉が出て来るのですが、これがそれに当たっていると思います。裁判の判決でよく「**無罪**」と言われますが、「**無罪**」ではありません。罪は有るのですが、受刑者にはならない、罪は犯したが、刑は課さないという意味です。だから「**これからはもう罪を犯してはならない**」と言われたのです。刑罰を免れたからと言って、罪を犯しても良いものではありません。何をしても罰せられないけれど、何をしても良いのではないのです。罪を犯しても罰せられないけれど、罪と戦い、神に祈り、強くならねばならないのです。なぜなら、私たちの罪は、キリストの上に負わせられたからです。キリストが私たちに代わって罰せられ、打たれたのです。本来なら私も処刑されていたのです。それをキリストが身代わりとなって処刑されたのです。だから私は解放されたのです。

イザヤ書 61 章で「**主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれた人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために。主が恵みをお与えになる年、…を告知して…**」(61:1~2)とあります。これはメシアの預言です。油というのは聖霊のことですが、この聖霊を注がれた者がメシア・キリストです。彼は「**良い知らせ**」を伝えるとあります。これはギリシャ語では「**ユー・アングリオン (エバンゲリオン)**」と言って、福音と訳されました。幸せの音ずれ、良い知らせです。キリストがもたらしたのは福音なのです。「**恵みをお与えになる年**」という言葉が出て来ますが、これはヨベルの年のことです。借金返せないけど、もう返さなくても良くなる年です。良い行いができないけど、赦されるのです。恵みと報酬は違います。報酬は働きによって支払われるものですが、恵みは働きがなくても与えられるものです。だからもう自分の弱さに涙しなくても良いのです。死ぬ時まで良い働きが出来なくても悲しまなくて良いのです。裁きは終わったのです。福音が始まったのです。だから、勇気を出して罪と戦い、少しでもキリストに喜ばれる生き方をし、キリストに似た者になりましょう。福音バンザイです。